



「信仰の時間」

ABCラジオ(朝日放送)
毎週日曜日 5:50~6:00AM

7月担当：ヌノ・デ・リマ神父
(玉造ブロック)

パンのチャレンジ (25日放送分より)

今日、カトリック教会ではイエス様が五千人に食べ物を与えるエピソードが朗読されます。イエス様の生涯を伝える4つの「福音書」どれにも記されている重要なエピソードです。

大勢の人がイエス様の教えを聞くために集まってきました。時が経つと弟子たちが、人びとを早く解散させたほうがいいと心配し始めました。ヨハネによる福音書では、イエス様が弟子たちを試すために、弟子の一人フィリポに「この人たちに食べさせるにはどこでパンを買えばよいだろうか」と尋ねます。「試す」という言葉にはマイナスなイメージがあるかもしれませんが、イエス様はここで弟子に、チャレンジしておられるのでしょうか。

フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えました。1デナリオンは当時、一日の生活費でした。したがって、二百デナリオンは二百日分の生活費です。なぜフィリポがここで、二百デナリオンという数字を出したのかはわかりませんが、フィリポがいろいろ計算したのでしょうか。非常に現実的な答えです。要するに、「どんなことをしても、皆にパンを与えることは不可能です」という答えです。

一方、もう一人の弟子のアンデ

レという人がイエスにこう言いました。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます」。しかし、すぐに付け足します。「こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」。結局、この二人の弟子は五千人の人々に食べさせるのは不可能だと思っていました。

しかし、イエス様のチャレンジは続きます。イエス様がパンと魚を取り、感謝をささげてから、弟子たちの手を通して人々に分け与えました。人びとは十分に食べただけでなく、あまったパンくずを集めると12のかごがいっぱいになったのです。

どのようにイエス様がパンと魚を増やしたかは記されていません。そのこと自体は大切ではないと思います。大切なのはイエス様からのチャレンジへの答えです。

どのようなチャレンジでしょうか？ 数字的な考え方から「分け与える」姿勢へ心を入れ替えるというチャレンジです。

仏教を学んだ、相田みつをさんが心に残る言葉を書いています。

奪い合えば足らぬ、 分け合えば余る

心に残るだけではなく、耳に痛い言葉です。

イエス様も、お釈迦様も同じことを教えておられます。自分だけが幸せになろうとしたら、自分も周りも不幸に陥りやすくなります。相手の幸せを求めるなら、そのまま、私の幸せになります。

真の幸せを得るためにこのイエス様、お釈迦様の教えを大切にしたいと思います。



この養成会は、カトリック学校の創立母体である修道会の後継者不足の対策として、一般の教員がキリスト教的価値観・世界観を体現する教育の場を存続させられるよう、カトリックの理解者・後継者の養成を主目的としている。

第一日目は、教区教育推進委員会委員長、高畠政行神父のあいさつと養成会の趣旨説明で始まり、仁川学院小学校の前川和裕先生からの講話があった。ある教員との出会いと別れから「共に生く」意味に気づかされたことやこれからの教員に求められるものについて話された。

仁川学院卒業生で、現在、会社経営者の岸本吉史氏は「今になって感じるカトリック校の良さ」について語った。就職当初、カトリック校出身であることをあま

り意識していなかったが、自分の利益を優先することに違和感をおぼえたことや自分のビジネスが弱者を意識しているということに、人格形成時のカトリック校の教えの影響を感じたと話された。

二日目の講話は、賢明学院中学高等学校の教頭補佐、西村佳也先生が担当。大阪聖母女学院から香里ヌヴェール学院への変革に至ったときの思いや目にしてきたカトリック校の現状、また賢明学院に勤務してから教員として自分が感じてきた違和感について話された。

その後、「カトリック校の使命・教員として何ができるか」というテーマでグループごとに話し合った。西村先生の講話から「安心して生徒が失敗できる環境づくり」についての話題が中心となり、各グループとも活発な意見交換がなされた。

宗教行事や日々の活動を通して、他者のために何か良いことができる生徒が育っているなど、カトリック校の共通点や良さをあらためて認識することができ、養成会に参加できてよかったとの感想があった。

コロナ禍中にもかかわらず、様々な方の協力により、今回の養成会を開催することができ、感謝している。養成会参加者がここで得たことを、それぞれの学校生活でいかしてもらえれば喜ばしい。

(文) 城星学園中学校・高等学校教諭 椿麻規子



姫路地区堅信式

固い絆とルーツの継承

7月25日(日) 11時から、加古川教会で16人の堅信式が行われた。加古川・相生・赤穂・網干および、たつの分教会からは92人の参加があった。

い受堅者として、指導者のもとで講習を受けた人もいる。

主催者の感想

「これまでと違った関係者だけの堅信式となり、緊張感が漂っていました。また、緊急事態宣言が発令しないことを祈った堅信式でした。滞りなく終了したことに神に感謝です。コロナ禍で受堅者の指導が困難な中、使命感を發揮して、感染も恐れず指導してくださった司祭やシスターたちには感謝です。有事の時でも神の導きがあれば、成し遂げることが出来ると体験させていただきま

この日は、全教会として初めて祝う「祖父母と高齢者のための世界祈願日」。司式者の前田万葉大司教は説教の中で、祈願日に向けた教皇メッセージ「わたしはいつもあなたとともにいる」を披露。受堅者には、堅信の秘跡によってイエスと信仰の固い絆で結ばれたこと、聖霊の導きによってキリストに似た行動をすることを話された。

この日に合わせて大司教が詠まれた句は「堅信の日」。若者と老人の結びつきは、自分のルーツを若者に継承していくことであると話された。

昨年開催予定だった地区合同堅信式は、緊急事態宣言によって延期。今回、コロナ感染対策として会場を分散して行うことになった。この一年の間、受堅者の中には成人になり故郷を巣立った人もいれば、新し



▲ 一年越しの晴れの日

教区教員養成会

テーマ「カトリック学校の使命・教員として何ができるかを考える」



8月10～11日(火・水)、第12回カトリック学校教員養成会がスクラファミリアで行われた。コロナ禍のため2年ぶりの実施となったが、教区内の各カトリック学校から15人の教員が参加した。

その後、「カトリック校の使命・教員として何ができるか」というテーマでグループごとに話し合った。西村先生の講話から「安心して生徒が失敗できる環境づくり」についての話題が中心となり、各グループとも活発な意見交換がなされた。

宗教行事や日々の活動を通して、他者のために何か良いことができる生徒が育っているなど、カトリック校の共通点や良さをあらためて認識することができ、養成会に参加できてよかったとの感想があった。

コロナ禍中にもかかわらず、様々な方の協力により、今回の養成会を開催することができ、感謝している。養成会参加者がここで得たことを、それぞれの学校生活でいかしてもらえれば喜ばしい。